

童

2018年3月2日.

毎年この時期の童に書くことですが、五右衛門風呂前の道(すてきな3人組かし前)に、クロッカスの芽が顔を出しました。毎年、一番に大地の植物が、春の芽を出す場所です。踏まれても除雪されてもどんなにじめられても、20年以上、必ず毎年一番に顔を出してくれます。春を告げる風物詩です。

個人的な事ですが、今年は平日でもよく、旧豊田村の温泉「もみじ荘」によく通います。ご存じのように、その道のりは、お父さんデイで歩いた道です。末っ子の通学でも行き来した道だけに、感慨深い道。通るたびに、お父さんデイの行き帰りの光景、エピソード、ルビン家のおやつ、ゴールでの居酒屋が浮かびます。同じように、先週の根子岳バックカントリー、これも感動的な体験でした。今年度は、本当にハードな事をしたなあ、感じています。

大地では、当たり前のように皆さんのエネルギーで、淡々とこなしてきていますが、きっと、数年後経ったら、とんでもないことをしてきたなあと実感するのではないのでしょうか。

子ども達の顔も、例年と同じように雪焼けで黒くなってきています。これも、春を告げる風物詩の一つでしょうか。連日の雪・そり遊び、クロカン、大地全員滑れるアルペンスキー・各種行事など、大地の毎日の歴史の象徴です。無事に当たり前として、淡々と季節が平穩に過ぎていったことを物語っています。雪解けが一気に進み、春がどんどん音をたててやってきています

そんな新しい音と、春の日差し、空気、匂いなどとともに、3月を味わいながら過ごしたいと思います。



【大地 生涯スポーツ 夜明け】

青ちゃんの大好きなもの。それは、夜明け前のエネルギーです。山並みが白んできて、太陽が昇るまでの時間の流れ。夜明け前の満点の星が次々に消えて、代わりにあたりが明るくなっていく行程。まさに、これから新しい日、歴史、人生が始まると言ったドラマチックな世界です。それらを味わえる大地の丘に25年前に住み始めて以来、ほぼ3時から4時に起きる生活の基本はここにあります。この環境に住んでいなかったら、寝坊の毎日だったでしょう。

22歳の時、バイクでオーストラリアの砂漠を3ヶ月キャンプしていた毎日。朝4時から砂漠の地平線が赤く染まり始めた頃、バイクにエンジンをかけ出発。早朝と夕方の涼しさの時に距離を稼がないと日中の暑さは耐えきれない。その毎日見た夜明けの光景、ひんやりした空気は忘れられません。

登山に行く朝。一緒に登った事がある方でしたらおわかりですが、大体朝3時半頃大地集合出発。大地の空には、満点の星が輝き、「今日は最高の天気になりそうだ」と出発。車を走らせながら、朝白んできた頃に、登山口着、登山開始のスケジュール。

登山キャンプ中も、ほとんど4時起床、5時出発。ヘッドライトでごそごそ起きて、暗い中で朝食を食べ、ヘッドライトを照らしながら登山開始。この暗さ、ライトが、実は子ども達も一人前の気分で盛り上がります。

大地の土木建築作業から木工作、農作業から雑用、更に、この童から事務作業に至るまで、それらはほとんど早朝に楽しみます。そして、夜明けのエネルギーを味わいます。瞑想にふける、ゆっくり精神的に何かを味わう時は、ののきな文庫の2階ラウンジが最高です。東向きのラウンジから朝日を眺め、振り返り西の窓を見ると、黒姫、戸隠が赤く染まっています。以前やっていたののきな文庫早朝開放日(通算1名のみ参加 大感動していましたが)に、この参加者と一緒にコーヒーを飲みながら、この感動を共有したことも忘れられません。

数年前の子ども祭りの早朝、朝3時頃お母さん達が集合して、パンか何かの仕込みをやり終えて、やはり一緒に満足感に浸りながらコーヒーを飲み、何事もなかったように家に帰り、子ども達も誰も早朝に出かけたことが気づかなく、まるで「こびとの靴や」のようにいつのまにか出来ていて、皆びっくりしていたというエピソードも懐かしいです。

そして、直近では、根子岳バックカントリー。数年前の夏の妙高山登山で、集合3時半という幼稚園では考えられない集合時間がありましたが、真冬の標高1000mを超える場所への集合が、6時前後というのも、冷静に考えると凄いことです。実は、もう少し早くても、夜が明ける瞬間を楽しめてよかったです。

もちろん、頂上にとどり着いた瞬間はこの上ない喜びでしたが、心に刻まれた光景、美しさは、朝6時頃、ゴルフ場から見た、北アルプスの山々、根子岳からオーロラのように登る朝日、その雪の世界の光景だったのではないのでしょうか。周囲360度見渡せば、人工物が何もなく、世界の中心にいるような気分、締まった冷たい空気、白い息、遠くに並ぶ北アルプス、雲海、目指す根子岳山頂、仲間達の吐く白い息、冷気。世界中で、この集団だけしか生き残っていないのではないかという存在感を感じていました。

この朝のエネルギーが、全員元気に誰もおんぶせず、自力で登れた源であると信じています。特に、幼児は体力ではありません。基本体力は、五歳児と5、60歳は同じだと言われています。大地の子どもは日々の遊びで体力があるとされていますが、それは、ほぼ間違いであり、気力とその体力を引き出す術を知っているだけです。その気力を引き出すエネルギーこそが、夜明けの世界に秘められていると信じています。午後や夕方の世界では、相当大人が演出しない限りは登る気力は湧いてこないでしょう。

そして、非日常的な世界は、まさに魔力があります。子ども達の大好きな魔法がかかった雰囲気があります。これも子ども達の気力を引き出すものでしょう。そんな、非日常的な世界でありながら、実は毎日繰り返されている世界。

まさに、メルヘンとファンタジーの世界。大人も子どもも人間は基本的に、その力を発揮するのは、人工的なサプリメントでもなく装備でもなく、非日常的なファンタジックな世界かもしれません。

そんな世界に、皆さんと一緒にいられることは幸せでした。

最近、モンベルの社長辰野勇さんの(古希を迎えた70歳)の対談集を読みました。現在2つの大学で、大学生相手に、カヌーやクライミング、雪山登山など、学生の先頭立って、率いて動いているということ。体力では学生に叶わないが、ひとたび自然の現場に出れば、誰にも負けずに先頭を行ってしまうということ。登山でもそんな大先輩にいつも巡り会います。それは、これまで培った技術や経験の賜、少しの工夫で無駄なく体力をセーブすることができるということ。それらの自信に裏付けされていると。よって、アウトドアスポーツは、年齢にかかわらず楽しむ事ができる「生涯スポーツ」だと語っておりました。

大地の暮らしや行事を通じて経験や技術を身につけ(装備は、モンベルに貢献しながら)、子どもと一緒にメルヘンとファンタジーの非日常エネルギーを共有しながら、大地生涯スポーツを楽しんでいきましょう。